

日本語と韓国語の第三者待遇表現 —聞き手の違いが他称詞と述語待遇選択に及ぼす影響—

Third person honorifics in Japanese and Korean:
Effects on selections of combinations of reference terms and predicates
for the third person when talking to a different 'powered' listener

林 炫情 (山口県立大学)

LIM, Hyunjung (Yamaguchi Prefectural University)

玉岡賀津雄 (広島大学)

TAMAOKA, Katsuo (Hiroshima University)

宮岡 弥生 (広島経済大学)

MIYAOKA, Yayoi (Hiroshima University of Economics)

1. はじめに

日本語の第三者に対する待遇表現は、話し手と聞き手、および話題の人物の三者間の関係にもとづいて相対的に選択されることが多く、韓国語の第三者に対する待遇表現は、話題の人と話し手との関係だけでもとづいて選択される場合が多い。このような違いを端的に表現するなら、日本語の待遇体系は相対的使い分けで、韓国語の待遇体系は絶対的使い分けであるといえる。特に、身内に言及する場面の両言語の使い分けの特徴に注目してみると、身内が第三者である場合に、身内に対して敬語を使わない日本語は相対敬語であり、身内であっても年上の人に対しては敬語を使う韓国語は絶対敬語として捉えることができよう。しかし、近年、日本では、若い世代が先生に対しても自分の父のことを「お父さん」と言うのを耳にすることがある。一方、韓国においても、言及する相手が目上であっても、場面や相手との関係に応じて、敬語を控え、敬語を使うべき人に対して敬語を使わない場合がしばしば報告されている (韓, 1982; 白, 1993; 林・深見, 2004)。また、従来の日本語と韓国語の敬語法の研究では、呼称語と述語との関係はある程度固定していると考えるのが慣例であった。つまり、呼称語で敬体を使えば、述語にも敬体がかくるということである。しかし、韓国語におけるスピーチレベルを呼称語と関連づけて言及している近年の先行研究のなかには、韓国語の呼称語は、場面や相手との関係によって流動的であり、各々述語の待遇と独立して使用でき、規則的な用法からはずれ、ある程度方略的にも使われているという記述が見られる (유, 1996; 이, 2002; 林・深見, 2004)。韓国語におけるこのような指摘については、日本語においても同じことが言えるであろう。つまり、日本語においても、インフォーマルかフォーマルかという場面の違いや、親しい間柄かどうかといった相手との関係に応じて、呼称語と述語表現の組み合わせが多様になることは充分に考えられる。そのため、日本語と韓国語の第三者に対する待遇法をより明らかにするために、まず、話し手の立場から聞き手と第三者の両方に配慮して発話する状況を把握し、さらに他称詞にみられる語彙的要素と述語の待遇表現に見られる文法的要素を総合的に検討していく必要がある。

そこで本研究では、まず2人の異なる聞き手と話題となっている第三者の関係に注目し、異なる社会的関係を有する聞き手に対して話し手が第三者について言及する場合に、他称詞と述語待遇の使い方に違いが見られるかどうかについて分析し、日韓両言語の第三者待遇表現を総括的に再検討する。

2. 研究方法

2.1 調査時期と調査協力者の属性

2004年6月から7月にかけて、日本の広島在住の日本人大学生263名と韓国ソウル在住の韓国人大学生219名を対象に調査を行った（合計は482名）。男女の内訳は、日本人の女性が164名、男性が99名、韓国人の女性が128名、男性が91名であった。年齢は、日本人の平均が19才4ヶ月（最年少が18歳、最年長が26歳）、韓国人の平均が20才4ヶ月（最年少が17歳、最年長が30歳）であった。

2.2 質問紙と分析方法

日本語と韓国語の第三者待遇表現の使い分けの特徴を検討するため、質問紙では1人の第三者に対して異なる2人の聞き手が登場する4つの場面を想定した。場面1は「『(親)は明日から海外旅行へ(行く)』と大学の先生にいう」場面、場面2は「『(親)は明日から海外旅行へ(行く)』と友達にいう」場面である。また、場面3は「『(大学の先生)は来週から出張に(行く)』と親にいう」場面、場面4は「『(大学の先生)は来週から出張に(行く)』と友達にいう」場面である。(親)と(大学の先生)を指し示す他称詞に関する項目については、予備調査¹⁾から得られた上位4位までの他称詞を選択肢にあげた。具体的にみると、「親」に対する他称詞の場合、日本語は「父と母」「両親」「お父さんとお母さん」「パパとママ」、韓国語は「abeoji/eomeoni」「bumonim」「abeojim/eomeonim」「appa/eomma」である。また、「大学の先生」に対する他称詞の場合、日本語は「先生」「姓+先生」「姓+さん」「姓名+さん」、韓国語は「gyosu(教授)」「gyosu+nim」「姓+gyosu+nim」「姓名+gyosu+nim」であった。また、「その他」という自由記入の回答欄を設けて必要があれば記入するようにした。しかし、分析では、他称詞の種類が複雑になるのを避けるため、「その他」に関する回答については特に分類せず、「その他」という1つの項目として扱うことにした。

(行く)という述語に関する項目については、分析の際、述語の待遇度の変化をある程度の基準を設けて検討する必要があったため、質問紙では、日本語の場合「行く」「行きます」「行かれます」「いらっしゃいます」、韓国語の場合「ga」「gamnida」「gasyeo」「gaseyo/gasimnida」とそれぞれ待遇度が違う4種類の選択肢をあげておいた。さらにこれ以外の表現については、「その他」という自由記述の回答欄に記入するように求めた。分析では、4種類の選択肢と「その他」で得られた両言語の述語の語形を、第三者と聞き手に対する敬意を含む表現が有れば「+」、無ければ「0」に分類し、4つのグループに分けた。第三者と聞き手に対する敬意は、第三者においては、日本語の場合は、尊敬接辞「- (ら)れる」や「交代形式の尊敬語(「行く」の場合、いらっしゃる)」、韓国語の場合は尊敬接辞「-si」使用の有無で、聞き手については、日本語の場合は「ます」、韓国語においては「haeyo体・hamnida体」といった丁寧語の使用の有無で分類した。グループ1は「行く」「ga」といった「第三者・敬意0、聞き手・敬意0」の述語形式で、グループ2は「行きます」「gamnida」といった「第三者・敬意0、聞き手・敬意+」の述語形式である。グループ3は「行かれる」「gasyeo」といった「第三者・敬意+、聞き手・敬意0」の述語形式、グループ4は「行かれます/いらっしゃいます」「gaseyo/gasimnida」といった「第三者・敬意+、聞き手・敬意+」の述語形式である。

分析では、日本語と韓国語の聞き手の違いによる他称詞と述語表現との呼応関係を全体的に把握するために、聞き手の違い(親のことをいう場面では「大学の先生と友達」、大学の先生をいう場面では「親と友達」)を従属変数として、他称詞(5種類)と述語表現(4種類)、そして話し手の男女差(男性・女性)の3種類の説明変数で区別する「決定木(Answer Tree)²⁾」の統計解析を用いた。決定木の解析には、SPSS 15.0のClassification Trees (SPSS, 2006)を使用した。聞き手の違いを従属変数にしたのは、第三者に対する待遇表現では、聞き手の違いが、他称詞と述語の待遇にもっとも影響を及ぼすと考えたからである。また、言葉遣いには男女差があることを考慮し、本分析では話し手が男性か女性かといった話し手の性差も説明変数の一つとして扱うことにした。

以下では、「親」と「大学の先生」のことを、異なる社会的関係を有する2人の聞き手に対して、日本語と韓国語ではそれぞれどう表現するかを全体的に概観しつつ、聞き手によって他称詞と述語待遇選択の出現頻度パターンがどのように現れるのかを階層的に検討する。また、その出現頻度パターンには話し手の男女差が影響しているかどうかについても検討を行う。

3. 分析結果

3.1 第三者が親の場合

第三者が親の場合における日本語と韓国語の他称詞と述語待遇を男女別にクロス集計すると、表1（日本語）、表2（韓国語）のようになる。

表1. 「第三者が親の場合」における日本語の他称詞と述語待遇の男女別クロス集計表

聞き手・性別	他称詞の種類	述語形式の種類								合計	
		グループ1		グループ2		グループ3		グループ4			
		第三者・敬意	聞き手・敬意	第三者・敬意	聞き手・敬意	第三者・敬意	聞き手・敬意	第三者・敬意	聞き手・敬意		
		0	0	0	+	+	0	+	+		
行く		行きます		行かれる		行かれます/いらつやいます					
回答数		%		回答数		%		回答数		%	
先生	父と母	0	0.0	43	26.2	0	0.0	1	0.6	44	26.8
	両親	1	0.6	90	54.9	0	0.0	4	2.4	95	57.9
	お父さんとお母さん	4	2.4	13	7.9	0	0.0	0	0.0	17	10.4
	パパとママ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	その他	1	0.6	7	4.3	0	0.0	0	0.0	8	4.9
	合計	6	3.7	153	93.3	0	0.0	5	3.0	164	100.0
女性	父と母	0	0.0	39	39.4	0	0.0	0	0.0	39	39.4
	両親	0	0.0	51	51.5	0	0.0	1	1.0	52	52.5
	お父さんとお母さん	0	0.0	7	7.1	0	0.0	0	0.0	7	7.1
	パパとママ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	その他	0	0.0	1	1.0	0	0.0	0	0.0	1	1.0
	合計	0	0.0	98	99.0	0	0.0	1	1.0	99	100.0
友達	父と母	6	3.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	6	3.7
	両親	19	12.2	4	2.4	0	0.0	0	0.0	23	14.0
	お父さんとお母さん	69	44.2	4	2.4	0	0.0	0	0.0	73	44.5
	パパとママ	1	0.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.6
	その他	61	39.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	61	37.2
	合計	156	94.5	8	4.9	0	0.0	0	0.0	164	100.0
女性	父と母	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	両親	2	2.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.0
	お父さんとお母さん	81	81.8	2	2.0	2	2.0	0	0.0	85	85.9
	パパとママ	0	0.0	0	0.0	1	1.0	0	0.0	1	1.0
	その他	11	11.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	11	11.1
	合計	94	94.9	2	2.0	3	3.0	0	0.0	99	100.0

まず表1の日本語の述語待遇レベルを概観すると、大学の先生に対しては「行きます」（男性93.3%、女性99.0%）、友達に対しては「行く」（男性94.5%、女性94.9%）が圧倒的に多かった。つまり、主体である親に対しては特に敬語を用いない点では共通しているものの、大学の先生に対しては丁寧語を用いる述語の語形が、友達に対しては丁寧語を用いない述語の語形が一般的に用いられているようである。また、親を指し示す他称詞の使用では、先生に対しては自分の親のことを「両親」（男性57.9%、女性52.5%）と言及することが多く、次に「父と母」（男性26.8%、女性39.4%）、「お父さんとお母さん」（男性10.4%、女性7.1%）の順であった。また、友達に対しては、親のことを「お父さんとお母さん」と言及するのが多く、とりわけ男性（44.5%）よりも女性（85.9%）の使用が顕著であった。一般的に相対的使い分けをする日本語の敬語は、身内については敬語を用いないのが原則であるといえよう。しかし本調査では、心理的に距離の近い友達に対しては、自分の親のことを「お父さんとお母さん」と言及するといった相対的使い分けの原則からはみ出た結果が見られており、しかもかなり

多用されていることが明らかになった。ところで、友達に対して親を指し示す他称詞の使用において、その他の項目の割合が、男性は37.2%、女性は11.1%と示されているが、これは自由記述に「おやじとおふくろ」、「父ちゃんと母ちゃん」、「父さんと母さん」が多く見られたからである。とりわけ、「おやじとおふくろ」は、「両親」よりも使用頻度が高く、男性は友達に対して一般的に用いていることが窺える。

表2. 「第三者が親の場合」における韓国語の他称詞と述語待遇の男女別クロス集計表

聞き手・性別	他称詞の種類	述語形式の種類								合計		
		グループ1		グループ2		グループ3		グループ4				
		第三者・敬意	聞き手・敬意	第三者・敬意	聞き手・敬意	第三者・敬意	聞き手・敬意	第三者・敬意	聞き手・敬意			
		0	0	0	+	+	0	+	+			
		ga		gamnida		gasyeo		gaseyo/gasimnida				
回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%			
先生	男性	abeoji/eomeoni	0	0.0	5	5.5	0	0.0	17	18.7	22	24.2
		bumonim	0	0.0	13	14.3	0	0.0	46	50.5	59	64.8
		abeonim/eomeonim	0	0.0	1	1.1	0	0.0	6	6.6	7	7.7
		appa/eomma	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3	3.3	3	3.3
		その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	合計	0	0.0	19	20.9	0	0.0	72	79.1	91	100.0	
	女性	abeoji/eomeoni	0	0.0	4	3.1	0	0.0	25	19.5	29	22.7
		bumonim	0	0.0	8	6.3	0	0.0	80	62.5	88	68.8
		abeonim/eomeonim	0	0.0	1	0.8	0	0.0	6	4.7	7	5.5
		appa/eomma	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4	3.1	4	3.1
その他		0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
合計	0	0.0	13	10.2	0	0.0	115	89.8	128	100.0		
友達	男性	abeoji/eomeoni	6	6.6	0	0.0	11	12.1	3	3.3	20	22.0
		bumonim	11	12.1	0	0.0	13	14.3	2	2.2	26	28.6
		abeonim/eomeonim	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
		appa/eomma	24	26.4	1	1.1	17	18.7	3	3.3	45	49.5
		その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	合計	41	45.1	1	1.1	41	45.1	8	8.8	91	100.0	
	女性	abeoji/eomeoni	8	6.3	0	0.0	4	3.1	2	1.6	14	10.9
		bumonim	2	1.6	1	0.8	8	6.3	0	0.0	11	8.6
		abeonim/eomeonim	0	0.0	0	0.0	2	1.6	1	0.8	3	2.3
		appa/eomma	47	36.7	0	0.0	46	35.9	7	5.5	100	78.1
その他		0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
合計	57	44.5	1	0.8	60	46.9	10	7.8	128	100.0		

親のことを指し示す他称詞の使用では、聞き手が大学の先生の場合、男女ともに「bumonim」（男性64.8%、女性68.8%）が最も多く、次に「abeoji/eomeoni」（男性24.2%、女性22.7%）、「aneonim/eomeonim」（男性7.7%、女性5.5%）、「appa/eomma」（男性3.3%、女性3.1%）の順であった。一方、友達に対しては、親のことを「appa/eomma」と言及するのが最も多く、これは、男性（49.5%）よりも女性（78.1%）の場合に顕著に見られた。大学生を対象にした本調査において幼児語である「appa/eomma」の使用が最も多かった点は大変面白い。次に、男性は「bumonim」（28.6%）、「abeoji/eomeoni」（22.0%）の順、女性は「abeoji/eomeoni」（10.9%）、「bumonim」（8.6%）、「abeonim/eomeonim」（2.3%）の順で使用頻度が高かった。「abeoji/eomeoni」より丁寧度の高い「abeonim/eomeonim」は、男性には見られなかった。

3.2 第三者が大学の先生の場合

第三者が大学の先生の場合における日本語と韓国語の他称詞と述語待遇を男女別にクロス集計すると表3（日本語）、表4（韓国語）のようになる。まず表1の日本語の述語使用をみると、親に対しては「行く」（男性65.9%、女性52.5%）という主体と聞き手両方を上げない語形を用いるのが最も多く、既述の3.1の大学の先生に親のことをいう場合と総合して考えると、日本語では身内である親に対しては、親が聞き手の場合も第三者の場合も、基本的に敬語を用いないことが一般的であるといえよう。

しかし、「行く」に比べると使用頻度が低いものの「行かれます/いらっしゃいます」（男性18.3%、女性26.3%）、「行きます」（男性13.4%、女性13.1%）も見られるので、親に対して丁寧語を用いることもあるようである。主体の大学の先生のみをあげる語形「行かれる」の使用頻度はかなり低かった（男性2.4%、女性8.1%）。また、聞き手が友達の場合、「行く」（男性84.1%、女性75.8%）が最も多く、親に対する場合同様、友達に対しても主体の大学の先生と聞き手の友達の両方とも上げない語形が一般的に用いられているようである。

表3. 「第三者が大学の先生の場合」における日本語の他称詞と述語待遇の男女別クロス集計表

聞き手・性別	他称詞の種類	述語形式の種類								合計	
		グループ1		グループ2		グループ3		グループ4			
		第三者・敬意	聞き手・敬意	第三者・敬意	聞き手・敬意	第三者・敬意	聞き手・敬意	第三者・敬意	聞き手・敬意		
		0	0	0	+	+	0	+	+		
		行く		行きます		行かれる		行かれます/いらっしゃいます			
回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%		
親	先生	43	26.2	6	3.7	1	0.6	4	2.4	54	32.9
	姓+先生	58	35.4	15	9.1	2	1.2	25	15.2	100	61.0
	姓+さん	3	1.8	1	0.6	1	0.6	1	0.6	6	3.7
	姓名+さん	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	その他	4	2.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4	2.4
	合計	108	65.9	22	13.4	4	2.4	30	18.3	164	100.0
	先生	17	17.2	0	0.0	2	2.0	5	5.1	24	24.2
	姓+先生	34	34.3	13	13.1	6	6.1	21	21.2	74	74.7
	姓+さん	1	1.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.0
	姓名+さん	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
合計	52	52.5	13	13.1	8	8.1	26	26.3	99	100.0	
友達	先生	68	41.5	6	3.7	2	1.2	3	1.8	79	48.2
	姓+先生	55	33.5	7	4.3	2	1.2	3	1.8	67	40.9
	姓+さん	6	3.7	0	0.0	0	0.0	2	1.2	8	4.9
	姓名+さん	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.6	1	0.6
	その他	9	5.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	9	5.5
	合計	138	84.1	13	7.9	4	2.4	9	5.5	164	100.0
	先生	30	30.3	5	5.1	2	2.0	1	1.0	38	38.4
	姓+先生	45	45.5	8	8.1	2	2.0	6	6.1	61	61.6
	姓+さん	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	姓名+さん	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
合計	75	75.8	13	13.1	4	4.0	7	7.1	99	100.0	

次に、大学の先生に言及する他称詞使用をみると、聞き手が親の場合は、「姓+先生」（男性61.0%、女性74.7%）、「先生」（男性32.9%、女性24.2%）と「先生」をつけて言及するのが最も多かった。大学の先生を、名前に「-さん」をつけて言及するケースはほとんど見られず、一般的な呼び方ではないといえよう。特に「姓名+さん」と言及するケースは一つも見られなかった。聞き手が友達の場合も大学の先生を「先生」（男性41.5%、女性30.3%）、「姓+先生」（男性33.5%、女性45.5%）と先生をつけて言及するのが圧倒的に多かった。親の場合同様、大学の先生を名前と言及するケースは少なく、とりわけ、女性の場合は一つも見られなかった。

一方、韓国語は、親に対して大学の先生に言及する場合は、述語待遇グループ4が最も多く見られており（男性73.4%、女性65.9%）、主体である大学の先生と聞き手である親を、両方とも上げる語形「gaseyo/gasimnida」が多用されるようである。しかし、主体である大学の先生は上げないまま聞き手の親のみを上げる「gamnida」の語形も見られていることから（男性26.4%、女性15.6%）、韓国語も場合に依って相対的な使い分けをしていることが分かった。また、友達に対して大学の先生に言及する場合、「ga」（男性51.6%、女性41.4%）と「gasyeo」（男性33.0%、女性46.9%）の使用が目立った。「ga」と「gasyeo」は前者が第三者を上げる語形、後者が第三者は上げない語形であるが、聞き手に

対して両方とも上げない語形である点では類似している。つまり、韓国語では友達を相手に話をする場合は、基本的に丁寧語を用いないのが一般的であるといえよう。

表4. 「第三者が大学の先生の場合」における韓国語の他称詞と述語待遇の男女別クロス集計表

聞き手・性別	他称詞の種類	述語形式の種類								合計		
		グループ1		グループ2		グループ3		グループ4				
		第三者・敬意聞き手・敬意	第三者・敬意聞き手・敬意	第三者・敬意聞き手・敬意	第三者・敬意聞き手・敬意	第三者・敬意聞き手・敬意	第三者・敬意聞き手・敬意	第三者・敬意聞き手・敬意	第三者・敬意聞き手・敬意			
		0	0	0	+	+	0	+	+			
ga		gamnida		gasyeo		gasyeo/gasimnida		回答数	%			
回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%					
親	男性	gyosu(教授)	0	0.0	2	2.2	1	1.1	1	1.1	4	4.4
		gyosu(教授)+nim	2	2.2	15	16.5	3	3.3	32	35.2	52	57.1
		姓+gyosu(教授)+nim	1	1.1	3	3.3	0	0.0	4	4.4	8	8.8
		姓名+gyosu(教授)+nim	0	0.0	4	4.4	0	0.0	23	25.3	27	29.7
		その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	合計	3	3.3	24	26.4	4	4.4	60	65.9	91	100.0	
	女性	gyosu(教授)	3	2.3	2	1.6	0	0.0	0	0.0	5	3.9
		gyosu(教授)+nim	2	1.6	10	7.8	4	3.1	45	35.2	61	47.7
		姓+gyosu(教授)+nim	1	0.8	4	3.1	0	0.0	15	11.7	20	15.6
		姓名+gyosu(教授)+nim	0	0.0	4	3.1	3	2.3	31	24.2	38	29.7
その他		1	0.8	0	0.0	0	0.0	3	2.3	4	3.1	
合計	7	5.5	20	15.6	7	5.5	94	73.4	128	100.0		
友達	男性	gyosu(教授)	15	16.5	0	0.0	0	0.0	1	1.1	16	17.6
		gyosu(教授)+nim	18	19.8	6	6.6	16	17.6	2	2.2	42	46.2
		姓+gyosu(教授)+nim	4	4.4	0	0.0	5	5.5	3	3.3	12	13.2
		姓名+gyosu(教授)+nim	6	6.6	1	1.1	7	7.7	1	1.1	15	16.5
		その他	4	4.4	0	0.0	2	2.2	0	0.0	6	6.6
	合計	47	51.6	7	7.7	30	33.0	7	7.7	91	100.0	
	女性	gyosu(教授)	18	14.1	1	0.8	1	0.8	1	0.8	21	16.4
		gyosu(教授)+nim	24	18.8	3	2.3	25	19.5	3	2.3	55	43.0
		姓+gyosu(教授)+nim	3	2.3	1	0.8	12	9.4	1	0.8	17	13.3
		姓名+gyosu(教授)+nim	6	4.7	0	0.0	21	16.4	4	3.1	31	24.2
その他		2	1.6	0	0.0	1	0.8	1	0.8	4	3.1	
合計	53	41.4	5	3.9	60	46.9	10	7.8	128	100.0		

次に、韓国語の大学の先生に言及する他称詞使用をみると、聞き手が親の場合は、教授という役職名に敬称のnimを付けた形式「gyosu(教授)+nim」(男性57.1%、女性47.7%)が最も多く、次に、「姓名+gyosu(教授)+nim」(男性29.7%、女性29.7%)、「姓+gyosu(教授)+nim」(男性8.8%、女性15.6%)、「gyosu(教授)」(男性4.4%、女性3.9%)の順であった。また、聞き手が友達の場合、使用頻度に違いはあるものの「gyosu(教授)+nim」(男性46.2%、女性43.0%)が最も多い点では、既述した親に対しての場合と同じ結果となった。しかし、親に対しての場合に比べると、友達に対しては大学の先生を-nimという敬称を付けずに役職名のみ「gyosu(教授)」と言及する頻度が(男性17.6%、女性16.4%)高くなっている点は注目できる。韓国語では役職名だけでは敬意を表すことができないため、目上の人に対しては-nimという敬称をつけて用いるのが一般的である。しかし本調査で明らかになったように、相手が友達の場合は、その待遇表現に関する規範意識が消極的に働いているようである。

4. 決定木の分析

上記の分析結果における表1と表2のクロス集計をもとに、日本語と韓国語の聞き手の違いによる影響について、他称詞と述語待遇表現の出現頻度パターンから全体的な傾向を把握するために、決定木分析を行った。以下では、第三者が親の場合と大学の先生の場合に分け、決定木分析の結果を報告する。

4.1 第三者が親の場合における決定木分析の結果

第三者が親の場合における決定木分析の結果、図1（日本語）と図2（韓国語）のような決定木が描かれた。聞き手の違いを分類する決定木の予測値は、図1が97.0%、図2が96.3%と非常に高く、統計分析の信頼度がかかなり高いことを示している。

まず、図1の日本語の場合をみると、決定木は一番上の親ノード0から述語待遇レベルの「グループ2・グループ4」と「グループ1・グループ3」からなる2つの子ノードへ分岐している（ $\chi^2=464.054$, $df=1$, $p<.0001$ ）。述語待遇レベルがそれぞれ違う「グループ2とグループ4」、「グループ1とグループ3」が同じノードになっているのは、先生と友達とでの出現頻度パターンが同じであることを意味している。また、ノード1からは、ノード3とノード4の樹木が伸びているが、これは聞き手の違いと述語待遇レベルのグループ2とグループ4の出現頻度の現れ方が他称詞によって異なることを示している。つまり、述語待遇レベルのグループ2とグループ4の出現頻度の現れ方から、他称詞の「父と母；両親；パパとママ」と「お父さんとお母さん」とで異なっていることが示された（ $\chi^2=29.860$, $df=1$, $p<.0001$ ）。また、ノード2からはそれ以上樹木が伸びていないことから、聞き手による他称詞使用の違いは認められないことが分かる。さらに、決定木では、話し手の男女差に関する樹木が描かれておらず、男女による違いは影響しないことを示している。

決定木の内訳を具体的にみると、本研究で用いた4種類の全ての述語待遇表現は526回（100.0%）、そして、「グループ2・グループ4」が267回（50.8%）、「グループ1・グループ3」が259回（49.2%）であった。また、「グループ2・グループ4」と「グループ1・グループ3」とを別に、聞き手が先生か友達かによる出現パターンをより詳細に分けてみると、聞き手を上げる語形「グループ2・グループ4」は、先生に対して用いられるのが圧倒的に多く（96.3%）、聞き手を上げない語形「グループ1・グループ3」は、友達に対して用いられるのが最も多かった（97.7%）。さらに、ノード1の述語待遇レベル「グループ2・グループ4」は、ノード3の「父と母；両親；パパとママ」とノード4の「お父さんとお母さん」とに分けられ、聞き手を上げる述語待遇表現は、「父と母；両親；パパとママ」と共起する頻度が高いことが分かった。

一方、韓国語は、それぞれの出現頻度には違いがあるものの、図2から分かるように日本語と全く同じパターンの決定木が描かれた。決定木は一番上の親ノード0から「グループ2・グループ4」と「グループ1・グループ3」からなる2つの子ノードから分岐している（ $\chi^2=361.695$, $df=1$, $p<.0001$ ）。また、ノード1は、ノード3とノード4の樹木が伸びており、述語待遇レベルのグループ2とグループ4の出現頻度の現れ方が他称詞によって異なることが示された（ $\chi^2=70.620$, $df=1$, $p<.0001$ ）。しかし、ノード2からはそれ以上樹木が伸びていないことから、聞き手による他称詞使用の違いは認められなかった。また、話し手の男女差は日本語同様、見られなかった。決定木の内訳を具体的にみると、本研究で用いた4種類の全ての述語待遇表現は438回（100.0%）、そして「グループ2・グループ4」が239回（54.6%）、「グループ1・グループ3」が199回（45.4%）と、第三者が親の場合は「グループ2・グループ4」のほうが比較的多く用いられているようである。しかし、聞き手が先生か友達かによる出現パターンをより詳細に分けてみると、述語待遇レベルは、聞き手が先生の場合は親への敬意の有無よりも聞き手への敬意により配慮した「gamnida；gaseyo/gasimnida」といった表現（91.6%）が、聞き手が友達の場合は聞き手への敬意を特に払っていない「ga·gasyeo」といった表現（100.0%）が多用されている。友達に対して敬意を払うケースも若干みられたが、先生に対して敬意を払わないケースは見られなかった。このことから、韓国語では友達に対しては敬意を払わない表現を、先生に対しては敬意を払う表現を使うのが一般的であることが明らかになった。また、「グループ2とグループ4」からは、他称詞、「abeoji/eomeoni；bumonim；abeonim/eomeonim」と「appa/eomma」との2つに分かれている。親に対する他称詞「abeoji/eomeoni；bumonim；abeonim/eomeonim」の出現頻度を上記の表2から詳細にみると、「bumonim（67.1%）>abeoji/eomeoni（23.3%）>abeonim/

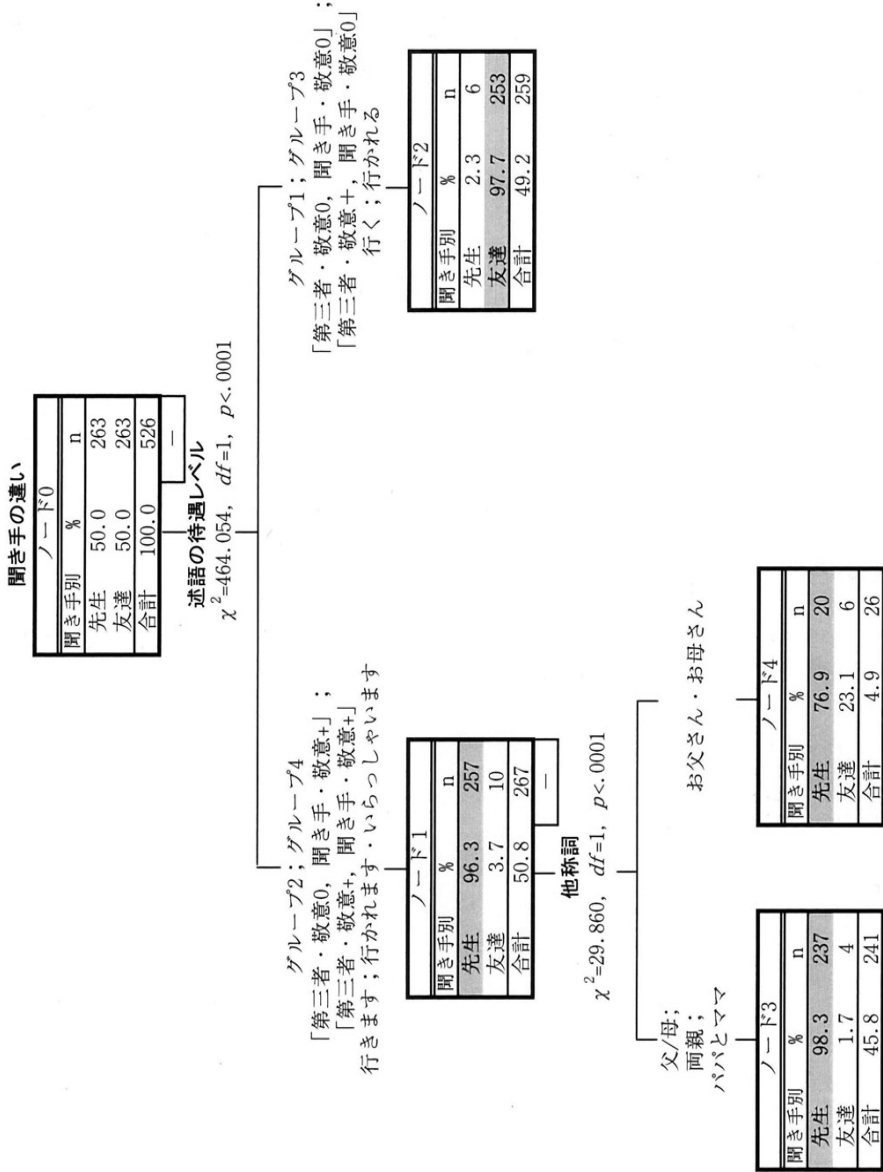


図1. 「第三者が親の場合」における日本語の他称詞と述語待遇に関する決定木

注1: n=526. 決定木は、5パーセントの有意水準、親ノードの出現頻度は10以上、子ノードの出現頻度は5以上で樹木を成長させた。
 注2: 述語の語形については、第三者と聞き手に対する敬意を含むことば使用の有無で、あれば「+」、なければ「0」に分類し、以下の4つの述語の待遇のグループ分けを行った。グループ1は、「第三者・敬意0, 聞き手・敬意0」の述語形式、「行く」などがここに含まれる。また、グループ2は、「第三者・敬意0, 聞き手・敬意+」の述語形式で、「行きます」などが含まれる。グループ3は、「第三者・敬意+, 聞き手・敬意0」の述語形式で、「行かれる」などが含まれる。最後に、グループ4は「第三者・敬意+, 聞き手・敬意+」の述語形式で、「行かれます・いらっしゃいます」などが含まれる。
 注3: 網掛けの部分は、先生と友達で出現頻度の多い方を示す。

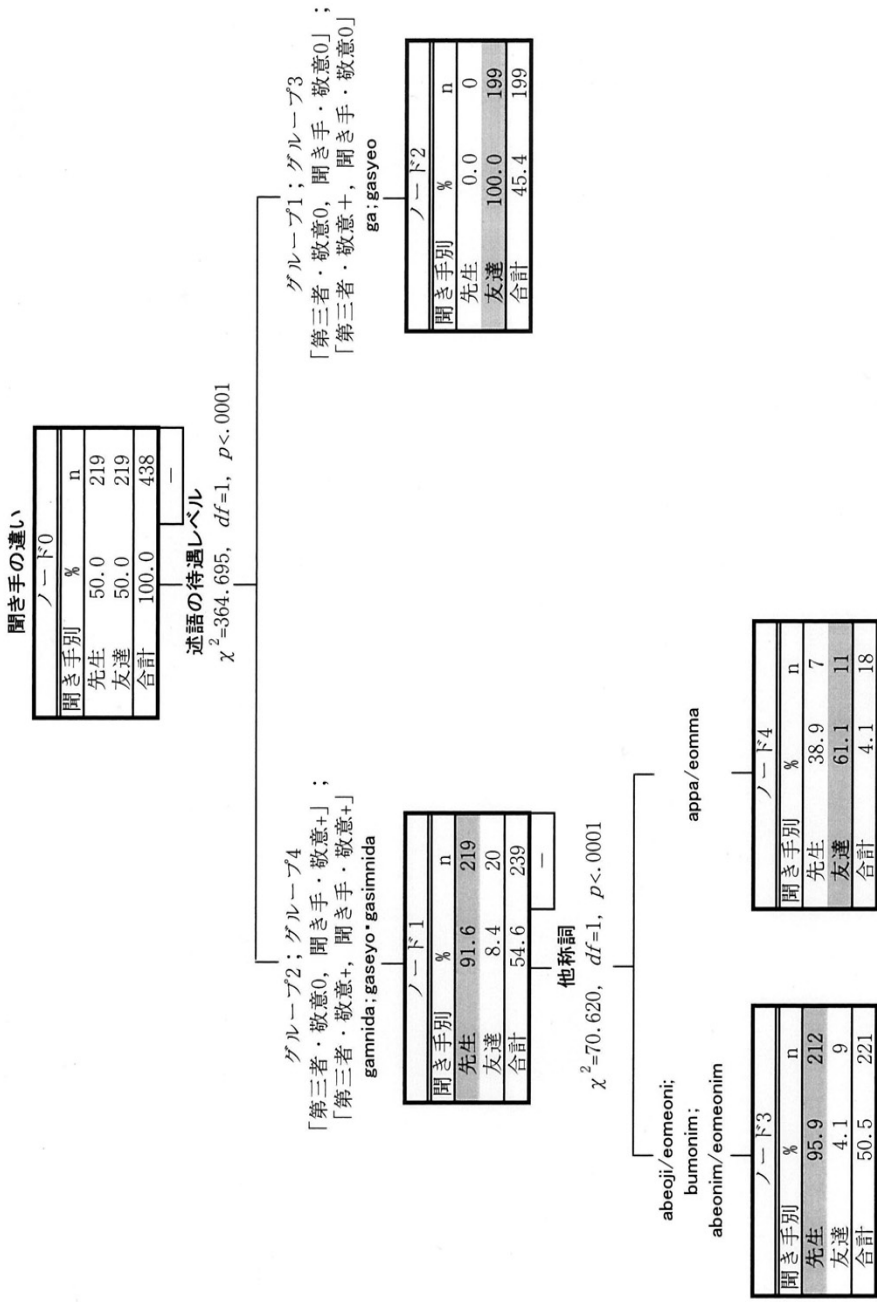


図2. 「第三者が親の場合」における韓国語の他称詞と述語待遇に関する決定木

注1: n=526. 決定木は、5パーセントの有意水準、親ノードの出現頻度は10以上、子ノードの出現頻度は5以上で樹木を成長させた。

注2: 述語の語形については、第三者と聞き手に対する敬意を含むことば使用の有無で、あれば「+」、なければ「0」に分類し、以下の4つの述語の待遇のグループ分けを行った。グループ1は、「第三者・敬意0, 聞き手・敬意0」の述語形式「ga」などが含まれる。また、グループ2は、「第三者・敬意0, 聞き手・敬意+」の述語形式で、「gamnida」などが含まれる。グループ3は、「第三者・敬意+, 聞き手・敬意0」の述語形式で、「gaseyo • gasimnida」などが含まれる。

注3: 網掛けの部分は、先生と友達で出現頻度の多い方を示す。

eomeonim (6.4%)」の順に出現頻度が高くなっている。しかし、決定木では、聞き手を上げる語形の述語とこれら3種類の他称詞との共起パターンには違いはなく、類似していることが示された。

聞き手別に他称詞の出現頻度をみると、聞き手が先生の場合は、親に対する他称詞として「abeoji/eomeoni ; bumonim ; abeonim/eomeonim」を用いるのが圧倒的に多く(212回、95.9%)、幼児語である「appa/eomma」は友達に対して用いるのが多かった(11回、61.1%)。しかし、「appa/eomma」は、出現頻度数は7回と少ないものの、大学の先生に対しても用いられている点は興味深い。上記の「3」の分析で示した表2の他称詞と述語待遇のクロス表をみると分かるように、大学の先生に自分の親を言及する「appa/eomma」は、全て「gaseyo/gasimnida」という「第三者・敬意+、聞き手・敬意+」の述語待遇レベルと共起して現れている。これは、従来の述語語尾に敬称を用いる場合は呼称語においても敬体を用いるという、呼称と述語語尾の呼応関係の統一原則からはみ出た結果である。韓国語の呼称語は、場面や相手との関係によって流動的であり、各々述語の待遇と独立して使用でき、規則的な用法からはずれ、ある程度方略的にも使われているというユ(1996)、イ(2002)、林・深見(2004)を支持する結果であるといえよう。

4.2 第三者が大学の先生の場合における決定木分析の結果

第三者が大学の先生の場合での決定木分析の結果は、図3(日本語)と図4(韓国語)の通りである。聞き手の違いを分類する決定木の分類予測値は、図3が61.2%、図4が88.6%であった。まず、日本語の場合をみると、図3から分かるようにノード0から分岐された子ノードは、ノード1が「グループ1」、ノード2が「グループ2・グループ3」、ノード3が「グループ4」に分類された($\chi^2=31.839$, $df=2$, $p<.0001$)。述語待遇レベルの「グループ2とグループ3」が同じノードになっているのは、聞き手である先生と友達の出現頻度パターンには違いがみられなかったことを意味する。また、ノード2からは、さらに、ノード4とノード5に樹木が伸びており、述語待遇レベルの「グループ3とグループ2」の出現頻度の現れ方は、他称詞の「先生」と「姓+先生、姓+さん」とで異なっていることが示された($\chi^2=5.899$, $df=1$, $p<.0001$)。話し手の男女の違いの影響は認められなかった。全体の出現頻度の526回(100.0%)から3つに分岐された述語待遇のそれぞれの出現頻度をみると、第三者と聞き手両方に対して上げない語形「グループ1」が373回(70.9%)、第三者を上げながら聞き手は上げない(グループ2)・第三者は上げないまま聞き手だけを上げる(グループ3)の「グループ2・グループ3」の語形が81回(15.4%)、第三者と聞き手両方を上げる語形「グループ4」が72回(13.7%)となり、「グループ1」の述語待遇が最も多く見られた。しかし、ノード1から聞き手が親か友達かの違いの影響をみると、「グループ1」は聞き手が友達の場合に、より多用されることが分かった。つまり、「行く」という聞き手と第三者両方とも上げない述語表現は、親(42.9%)に対してよりは友達(57.1%)に対して用いるのが多いようである。ノード2の「グループ2・グループ3」の述語待遇と他称詞との共起関係をみると、「行かれる；行きます」という述語語形と大学の先生を指し示す「先生」は友達(62.5%)に対して、「姓+先生；姓+さん」は親(66.7%)に対して、より多用された。ただし、表3で示したように、大学の先生のことを名前に「-さん」をつけて言及するケースは稀であったことを付け加えておきたい。ノード3の主体と聞き手の両方をあげる語形「グループ4」は、親に対して用いるのが多く、「行かれる/いらっしゃいます」は親に対して用いる傾向が強いようである。

一方、図3の韓国語の場合は、決定木が述語待遇グループで3つに分けられている点では日本語と類似しているものの、4つの述語待遇グループ分けのパターンが日本語と若干異なっていた。決定木は一番上の親ノード0から「グループ1・グループ3」、「グループ2」、「グループ4」からなる3つの子ノードから分岐している($\chi^2=263.406$, $df=1$, $p<.0001$)。樹木はそれ以上伸びていないことから、聞き手による他称詞使用の違いは認められなかったことが分かる。話し手の性差は認められなかった。

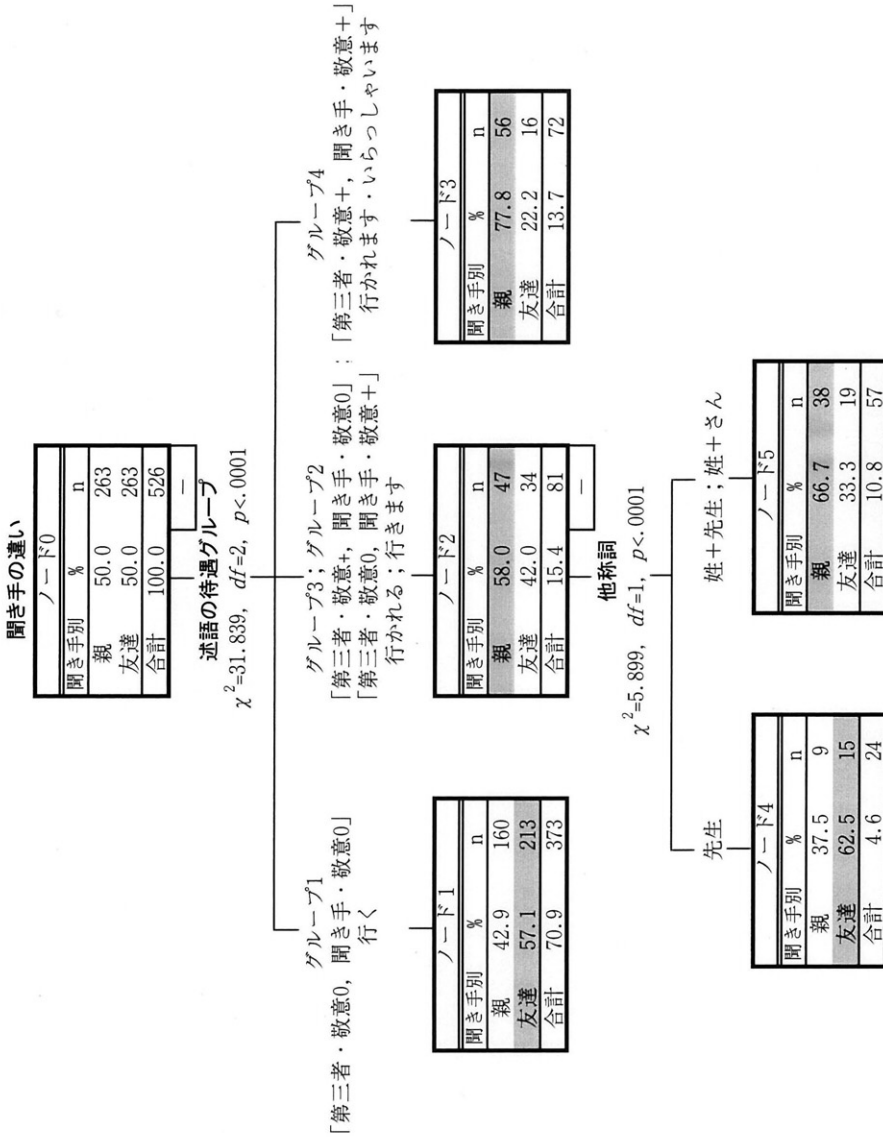


図3. 「第三者が大学の先生の場合」における日本語の他称詞と述語待遇に関する決定木

注1: n=438. 決定木は、5パーセントの有意水準、親ノードの出現頻度は10以上、子ノードの出現頻度は5以上で樹木を成長させた。

注2: 述語の語形については、第三者と聞き手に対する敬意を含むことば使用の有無で、あれば「+」、なければ「0」に分類し、以下の4つの待遇のグループ分けを行った。グループ1は、「第三者・敬意0, 聞き手・敬意0」の述語形式、「行く」などがここに含まれる。また、グループ2は、「第三者・敬意0, 聞き手・敬意+」の述語形式で、「行きます」などが含まれる。グループ3は、「第三者・敬意+, 聞き手・敬意0」の述語形式で、「行かれる」などが含まれる。最後に、グループ4は「第三者・敬意+, 聞き手・敬意+」の述語形式で、「行かれます・いらっしやいます」などが含まれる。

注3: 網掛けの部分は、親と友達で出現頻度の多い方を示す。

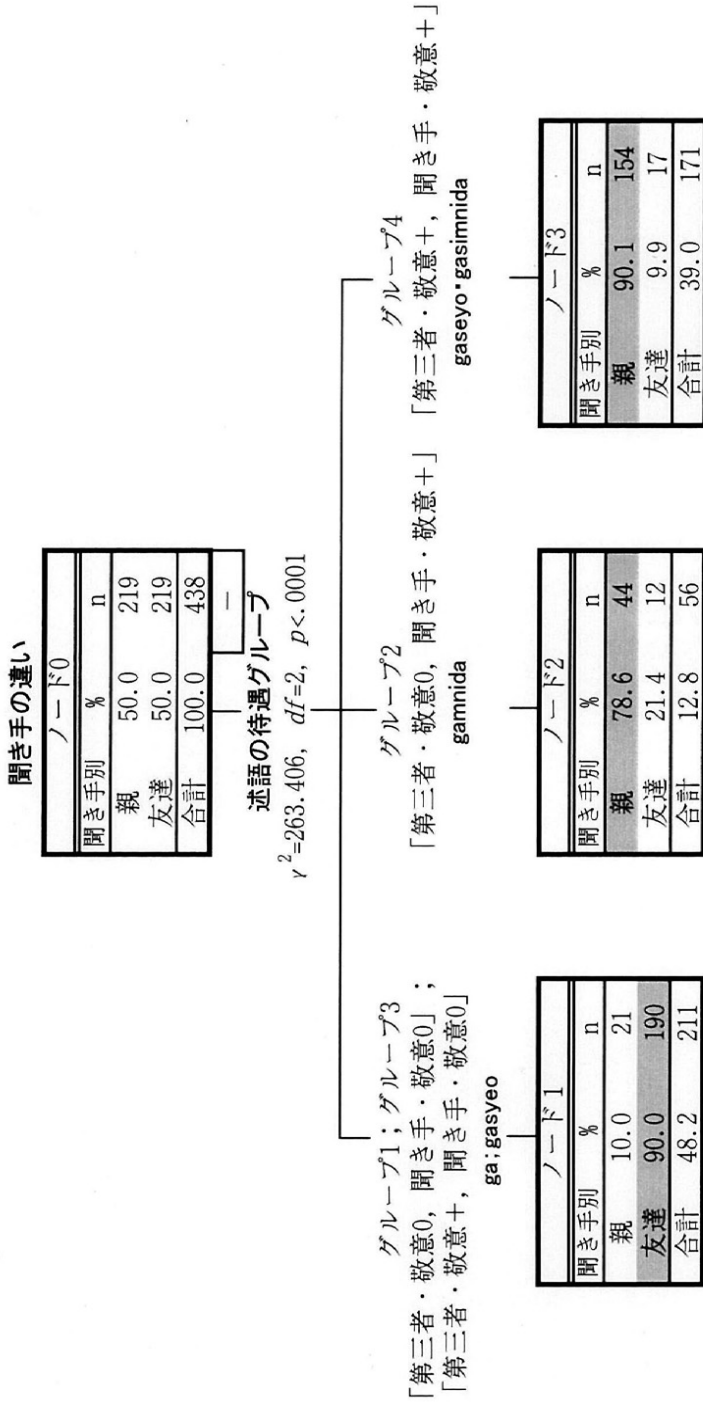


図4. 「第三者が大学の先生の場合」における韓国語の他称詞と述語待遇に関する決定木

注1: n=438. 決定木は, 5パーセントの有意水準, 親ノードの出現頻度は10以上, 子ノードの出現頻度は5以上で樹木を成長させた。
 注2: 述語の語形については, 第三者と聞き手に対する敬意を含むことば使用の有無で, あれば「+」, なければ「0」に分類し, 以下の4つの述語の待遇のグループ分けを行った。グループ1は, 「第三者・敬意0, 聞き手・敬意0」の述語形式, 「ga」などがここに含まれる。また, グループ2は, 「第三者・敬意0, 聞き手・敬意+」の述語形式で, 「gammida」などが含まれる。グループ3は, 「第三者・敬意+, 聞き手・敬意0」の述語形式で, 「gasyeo」などが含まれる。最後に, グループ4は「第三者・敬意+, 聞き手・敬意+」の述語形式で, 「gaseyo・gasimnida」などが含まれる。
 注3: 網掛けの部分は, 親と友達で出現頻度の多い方を示す。

全体の出現頻度（438回, 100.0%）から3つに分岐された述語待遇の出現頻度をみると、聞き手に対しては敬意を払わない述語表現の「グループ1・グループ3」が211回（48.2%）、第三者と聞き手両方に敬意を払う「グループ4」が171回（39.0%）、聞き手のみに敬意を払う「グループ2」が56回（12.8%）となっており、本調査では「グループ1・グループ3」が最も多く出現している。しかし、ノード1から聞き手が親か友達かの違いの影響をみると、「グループ1・グループ3」は、友達に対して多用されることが分かった。つまり、聞き手への敬意を含んでいない語形「ga:gasyeo」は、友達（90.0%）に対して用いるのが一般的であることが分かる。また、ノード2の「グループ2」の内訳は、親に対して78.6%、友達に対して21.4%であることから、「gamnida」といった主体は上げないまま聞き手のみを上げる述語待遇は、親に対して用いるのが一般的であるといえる。さらに、ノード3の「グループ4」の場合も、親に対して用いるのが圧倒的に多く、「gaseyo・gasimnida」といった第三者と聞き手の両方に対して敬意を示す表現は、親に対して一般的に用いられているようである。

4. 終わりに

聞き手による日本語と韓国語の第三者に対する待遇表現の使い分けを、他称詞と述語待遇の呼応関係の観点から検討してみた結果、本研究では、日本語は相対的な使い分け、韓国語は絶対的な使い分けの傾向が強いものの、今まで言われてきた基準ではうまく説明がつかないケースを見出した。例えば、場面2の「友達に『自分の親』のことをいう」場面では、日本語では「お父さん・お母さん」（60.1%）が、韓国語では「appa・eomma」（66.2%）が最も多用される傾向が見られた。また、日本語の場合、「お父さん・お母さん」という「父・母」より高い待遇をもつ他称詞であっても、「行かれる」「行かれます」「いらっしゃいます」などといった述語待遇表現よりも「行く」「行きます」などといった述語待遇表現と共起して用いられるケースが圧倒的に多いことが分かった。このような、主体を表す他称詞は上げておきながら、述語では身内を上げない待遇表現を用いるケースは、主語と述語の待遇が必ずしも一致していない点で大変興味深い。韓国語における「appa・eomma」については、述語形式との呼応関係に有意な違いは見られていないことから、「お父さん・お母さん」に比べると述語表現の選択に柔軟さがうかがえる。

本調査では、相対的および絶対的な使い分けに関する基準から逸脱した表現を見出した。これは、両言語共に、とりわけ友達が聞き手の場合に起こりやすくなっている。つまり、比較的近い間柄では言語使用に関する規範意識が弱まりやすい点で、日本語と韓国語は類似しているといえよう。また、本調査の決定木分析では、話し手の男女差の影響は、全ての場面で見られなかった。

本研究で明らかになったように、これまでの規範からは逸脱している表現が見られるようになったこと背景には、日本と韓国の両者において、社会の変化に伴う規範意識の変化があることが考えられる。さらに日本については、日本語力の低下の一つである、いわゆる「敬語の乱れ」と無関係ではないだろう。つまり、これまでの規範から逸脱した表現を使っても許される場面が増えたため、次第に使い方が変化してきたのだと考えられる。ことばは社会を映す鏡である。今回の調査結果が今後どのように変化していくのか、興味深い。

注

(1) 「親」と「大学の先生」に対する他称詞の使用に関する質問紙調査を韓国のソウル在住の韓国人大学生15名と日本の広島在住の日本人大学生15名を対象に行った。回答はすべて自由記入式で複数回答を求めた。その結果、「親」に関する他称詞の場合、日本語では「父と母」、「両親」、「お父さんとお母さん」、「パパとママ」の他、「おやじとおふくろ」、「父ちゃんと母ちゃん」などの使用が見られた。これに対し、韓国語では「abeji/eomeoni」「bumonim」「appa/eomma」「abeonim/eomeonim」などが自分の親に対する他称詞として用いられていた。一方、「大学の先生」に関す

る他称詞の場合、日本語では「先生」、「姓+先生」、「姓+さん」、「姓名+さん」の他、「教授」、「姓+教授」などの使用が見られた。これに対し、韓国語では「gyosu (教授) +nim」、「姓+gyosu (教授) +nim」、「gyosu」、「姓名+gyosu (教授) +nim」の他、「seonsaeng (先生) +nim」、「seonsaeng (先生) +nim」などの使用が確認された。

- (2) 本研究の分析デザインは、2 (日本語・韓国語) × 5 (他称詞) × 4 (述語表現) である。はじめの2変数で2×5を述語表現ごとにカイ二乗検定により4回分析を繰り返すこともできるが、それでは全体を概観できないという弱点がある。本研究で使用した決定木 (Answer Tree) 分析は、1つの従属変数を複数の説明変数から予測し、その独立変数を樹木のかたちで階層的に描き出すことができる。そこで、本研究では、決定木の分析手法を採用した。言語の共起頻度や要因の因果関係を明らかにする統計手法としての決定木分析の有効性については、林・玉岡・宮岡 (2005)、玉岡 (2006)、林・玉岡・宮岡・金 (2007)、Tamaoka, Lim, & Miyaoka. (2007) においても検証が行われている。

参考文献

- 林炫情・深見兼孝 (2004) 「他称詞と述語に見られる待遇法に関する日韓対照研究」『国際協力研究誌』10 (2), 13-27.
- 林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生 (2005) 「味覚形容詞「甘い」「辛い」「しぶい」「苦い」「塩辛い」「酸っぱい」の基本義と別義に関する新聞および小説のコーパス出現頻度の解析」『日本語学研究』12, 131-142.
- 玉岡賀津雄 (2006) 「決定木」分析によるコーパス研究の可能性: 副詞と共起する接続助詞「から」「ので」「のに」の文中・文末表現を例に」『自然言語処理』13 (2), 169-179.
- 林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生・金秀眞 (2007) 「丁寧度の判定に関わるポライトネス・ストラテジーの要因についての階層的分析」韓国日本文化学会第29回国際大会予稿集
- Tamaoka, K., Lim, H., & Miyaoka, Y. (2007) 「Effect of gender-identity and gender-congruence on levels response politeness」日本語用論学会第10回大会 (世界大会) 予稿集
- 白同善 (1993) 「呼称表現に見られる日韓敬語法分析」『名古屋大学人文科学研究』22, 111-128.
- 韓美卿 (1982) 「韓国語の敬語の用法」寺村秀夫他 (編) 『講座日本語学12-外国語との対照(金)』185-198, 明治書院
- 이정복 (2002) 『국어 경어법과 사회언어학』月印
- 유송영 (1996) 「국어 칭자대우어미의 교체사용과 칭자 대우법체계-힘과 유대의 정도성에 의한 담화분석적 접근」고려대 대학원 박사논문

(社会対照言語学/言語心理学/日本語教育)

한국어와 일본어의 제 3자 대우표현
- 청자의 차이가 타칭사와 술어 대우 선택에 끼치는 영향 -

Third person honorifics in Japanese and Korean:
Effects on selections of combinations of reference terms and
predicates for the third person when talking to a different
'powered' listener

LIM, Hyunjung (Yamaguchi Prefectural University)
TAMAOKA, Katsuo (Hiroshima University)
MIYAOKA, Yayoi (Hiroshima University of Economics)

본고에서는 한국어와 일본어의 제 3자 대우표현, 그 가운데에서도 청자의 차이에 대한 화자의 언어 태도를 타칭사와 술어 대우의 호응관계를 중심으로 고찰하였다. 타칭사와 술어 대우의 호응관계를 전체적으로 파악하기 위해 決定木 (Answer tree) 를 도입해 분석한 결과, 선행연구에서 지적되어 온 바와 같이, 한국어는 절대적 사용방법, 일본어는 상대적인 사용방법의 경향이 강하긴 하지만, 그 기준에서 이탈하는 표현을 추출할 수 있었다. 특히 이러한 현상은 양언어 모두 청자가 친구인 경우에 빈번하게 일어나는 것을 밝힐 수 있었다. 즉, 비교적 가까운 사이에서는 언어사용에 관한 규범의식이 약해지기 쉽다는 점에서, 일본어와 한국어는 비슷하다고 할 수 있다. 양언어에 있어서 이러한 대우표현의 규범에서 이탈하는 현상이 발생하는 배경에는 한국과 일본의 사회변화에 따른 규범의식의 변화가 일어나고 있는 것에 그 원인이 있다고 해석된다. 본 연구에서는 화자의 남녀차에 관한 영향은 보여지지 않았다.